

2026 3

ナイル

現代短歌ナイル

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

芙貴子ワールド／松本芙貴子
偶然の糸を遊ぶ【21】

徒然に／じゅん・H
人間の記憶というものは

ショートショート【5】／鏡マリコ
河内圭子作品から

わたしのセレクト【1月号から】
小村井敏子 濱谷美代子

新年会報告



NILE CAMPUS

321

伯梅閑話 — 伯龍と芦州 —

小村井敏子 (五代目神田伯梅)

伯龍が講談と出会ったのは、小学生のときだ。学校に来た講談師の講談を聞いて夢中になった。学校を抜け出して講談を聞きに行き、父親の反対を押し切って講談師になった。本人は嫌がっていたが、いくつになっても「かわいい」と周囲に言われた。

人にものをあげたい人で、私が買った茶道の懐石料理の本を読まないままでしたら、行きつけの魚屋にあげてしまった。怒る気にもならない私だった。

六代目小金井芦州(こがねい ろしゅう) 師と六代目神田伯龍は、同じ年。私が知ったころの芦州師の講談に衰えがあったようで、六代目伯龍は「昔はうまかった」と言っていた。戦後、アメリカの統治下となり、日本が戦争をしないようにと、武士や戦いの話ではできなくなり、いくさの話をする修羅場が基本の講談師の仕事は激減した。千代夫人と一緒にたばかりの伯龍は、時々高座にあがることはあっても、生活費は不足。親から、米などもらったり、生活費を借り(全額返せたかどうかは疑問) たりしていた。芦州師は、講談を離れた仕事をしてしのいでいた。そんなころ、こんなことがあった。昭和三十四年十二月十五日、昭和三十五年十月二十二日の日記に書いてあった。

昭和三十四年一月二十七日晴

本牧へ行き掛けに河内屋に寄り母より二千円借金 上野松坂屋へ寄り牛肉を買ひ鱗慶君へ進呈 祐天吉松続きを読む 帰途また松坂屋に寄り足袋を買ひ帰宅

(鱗慶とは、五代目西尾鱗慶。のちの六代目小金井芦州師だ)

そのとき、もらって喜んだと思えるか。考えてみてほしい。そのあと、伯龍・千代の悪口を言い広めたのは彼だった。人は、自分の物差しでしか人をはかれない。女性にもてたという芦州先生の間接では、妬むしかなかったのだろう。